

高齢社会における聞こえの問題

—難聴者の周囲の人が感じるコミュニケーションの悩み—

研究開発室 水野 映子

—要旨—

- ① 中高年者を対象とするアンケート調査を実施し、回答者の周囲にいる難聴者の状況をたずねた。
- ② これまで周囲に難聴者がいたことがある回答者の割合は、8割を超える。そのうち最も身近な難聴者の9割近くは60歳以上であり、約半分は自分の親である。
- ③ 回答者は、難聴者とのコミュニケーションについて、難聴者が「話を聞き間違える」「話についていけない」などの問題や、「その人と話す時間がかる」「その人に情報を正しく伝えるのは難しい」などの悩みを感じている。
- ④ 難聴者の聞き取り状況が悪いほど、また難聴の自覚がないほど、回答者は難聴者とのコミュニケーションに関して問題や悩みを感じ、コミュニケーションがうまくいっていないと評価している。
- ⑤ 難聴者が会話の相手に配慮を依頼することは総じて少ない。

1. 調査研究の背景と目的

加齢などが原因で耳が聞こえにくくなった高齢者は、日常生活において、特にコミュニケーションの面でさまざまな問題をかかえていると考えられる。筆者が1999年に60歳以上の人を対象に実施したアンケート調査では、回答者本人が聞こえにくい場合はもちろんのこと、家族などの周囲の人が聞こえにくい場合にもコミュニケーション上の不便さや不安、対応方法に関する悩みなどを感じていることが自由回答などから示唆された（水野 2000）。

そこで、新たに中高年者を対象とするアンケート調査を実施し、本人ならびにその周囲にいる難聴者のコミュニケーションに関する問題を詳しく調査することとした。そのうち本稿では、回答者の周囲にいる難聴者についてたずねた結果を紹介する（回答者本人についてたずねた結果は、今後別のレポートで紹介する予定である）。

アンケート調査の概要は図表1の通りである。調査対象者を50歳以上としたのは、この世代では本人、または配偶者や親などの周囲の人に、耳の聞こえにくい人が比較的多いと予想したためである（ただし、75歳以上の方は対象者が少なかったため対象から外した）。図表2には回答者の性・年齢構成を示す。

図表1 アンケート調査の概要

- ・調査対象：全国の50～74歳の男女700名
- ※当研究所の生活調査モニターおよびその家族より抽出
- ・調査時期：2007年12月
- ・調査方法：郵送配布、郵送回収
- ・有効回収数（率）：668名（95.4%）

図表2 回答者の性・年齢構成

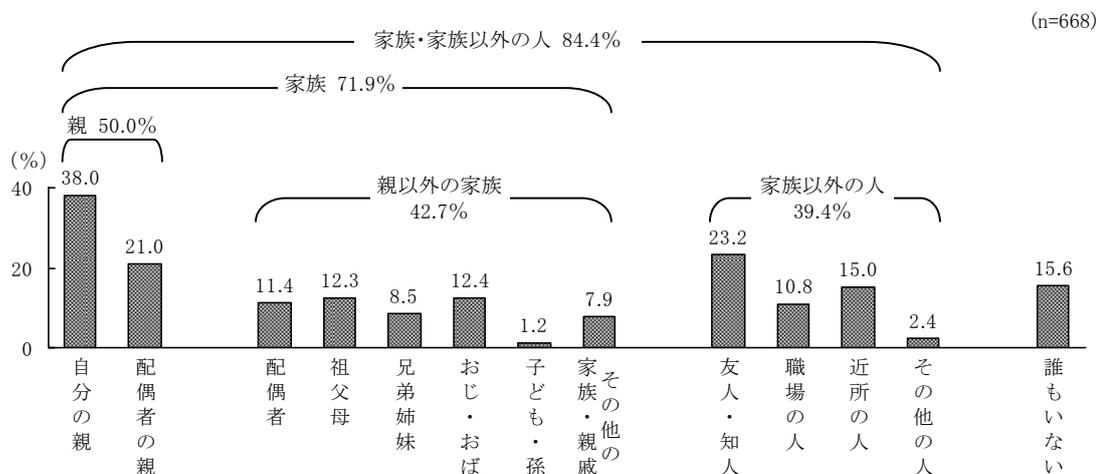
	50～54歳		55～59歳		60～64歳		65～69歳		70～74歳		計	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
男性	56	8.4	78	11.7	69	10.3	72	10.8	64	9.6	339	50.7
女性	70	10.5	66	9.9	66	9.9	70	10.5	57	8.5	329	49.3
計	126	18.9	144	21.6	135	20.2	142	21.3	121	18.1	668	100.0

2. 難聴者の属性

これまで回答者の周りに、耳が聞こえにくそうな人や聞こえない人（以下、「難聴者」）がいたことがあるかどうかをたずねた。図表3の通り、「誰もいない」は15.6%のみであり、残りの84.4%の人の周囲には難聴者がいたことがわかる。

難聴者の続柄は「自分の親」（38.0%）の割合が最も高く、次いで「友人・知人」（23.2%）、「配偶者の親」（21.0%）の順となっている。難聴者が自分か配偶者の『親』にいる割合はちょうど半数の50.0%、『親以外の家族』にいる割合は42.7%、親も含めた『家族』にいる割合は71.9%、『家族以外の人』にいる割合は39.4%である（いずれも複数の項目を選択している場合は合計から重複を除いてある）。

図表3 周囲の難聴者の続柄＜複数回答＞



さらにこの中で、最も身近な人（現在最もよく接している人、または過去に最もよく接していた人）を1人だけたずねた（図表省略）。選択した割合が圧倒的に高かったのは前問と同様に「自分の親」（36.3%）であり、これに続く「配偶者の親」（11.9%）、「配偶者」（11.3%）、「友人・知人」（11.0%）は1割強、それ以外の項目はいずれも1割未満となっている。『親』の合計は48.2%、『親以外の家族』の合計は29.3%、『家族以外の人』の合計は21.6%である。

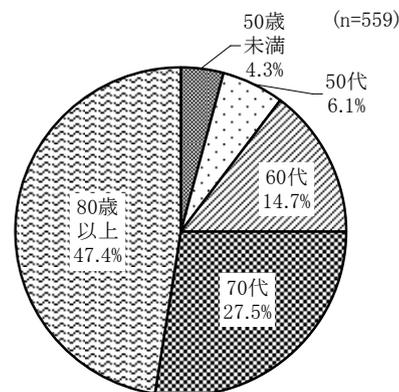
以下では、周囲に難聴者がいたことのある559人に対し、最も身近な難聴者について質問した結果を述べる。

その難聴者とは現在付き合いがあるかどうかをたずねたところ、「付き合いがある」（63.1%）場合の方が「付き合いはない（亡くなった場合も含む）」（36.7%）場合より多かった（図表省略）。

難聴者の年齢（現在付き合いがある場合は現在の年齢、付き合いがない場合は付き合いがあった当時の年齢）は「80歳以上」（47.4%）が約半数で最も多く、次いで「70代」（27.5%）、「60代」（14.7%）となっている（図表4）。つまり、60歳以上が約9割近くを占めている。このことから、最も身近な難聴者の多くは高齢者とみなせる。

また、難聴者の性別は男性（47.2%）と女性（52.6%）がほぼ半々となっている（図表省略）。

図表4 難聴者の年齢



注:回答者は周囲に難聴者がいたことがある人(ただし、最も身近な難聴者は誰かをたずねた質問に無回答だった人を除く)。以下の図表もすべて同じ。

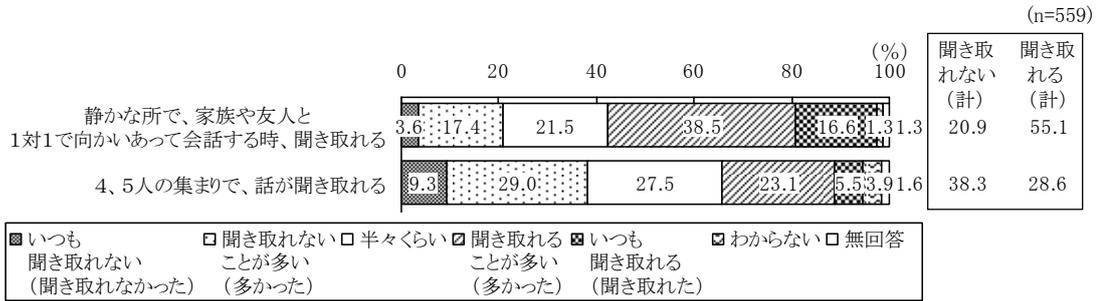
3. 難聴者の聞こえの状況

(1) 会話の聞き取り程度

周囲の難聴者が会話をどの程度聞き取れるかをたずねた。以下では、「いつも聞き取れない（聞き取れなかった）」と「聞き取れないことが多い（多かった）」の合計を『聞き取れない』、「いつも聞き取れる（聞き取れた）」と「聞き取れることが多い（多かった）」の合計を『聞き取れる』とする。

図表5の通り、「静かな所で、家族や友人と1対1で向かいあって会話する時」に『聞き取れない』割合は20.9%と比較的低いが、「4、5人の集まりでの話」を『聞き取れない』割合はその倍程度の38.3%となっている。静かな場所での1対1の会話なら何とか聞き取れても、複数人の会話になると聞き取りにくくなる人が多いといえる。

図表5 難聴者の会話の聞き取り状況



注1:これらの質問項目は鈴木ほか(2002)が開発した「きこえについての質問紙」を元にしてのいる。
 注2:図表中の数値は小数点第2位を四捨五入して表示しているため、図表中の数値を合計しても合計値とは一致しない場合がある。以下の図表もすべて同じ。

(2)難聴の自覚

周囲の難聴者が聞こえにくいことをどの程度自覚している (していた) かをたずねた。図表は省略するが、「十分自覚している (していた)」が51.3%、「ある程度自覚している (していた)」が36.1%、「あまり自覚していない (していなかった)」が9.3%、「まったく自覚していない (していなかった)」が1.4%、「わからない」が0.5%となった。以下では、「あまり自覚していない (していなかった)」と「まったく自覚していない (していなかった)」の合計を『自覚していない』とする。

4. 難聴者のコミュニケーションへの影響

(1)コミュニケーション上の問題

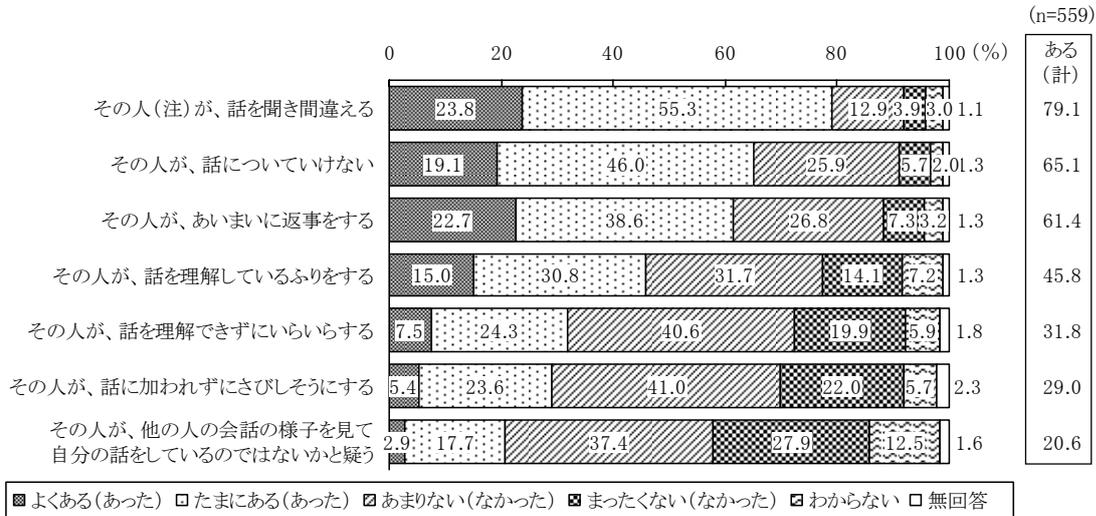
難聴者が周りの人と会話をする時に、図表6のような状況になることがどの程度ある (あった) かをたずねた。以下では、「よくある (あった)」と「たまにある (あった)」の合計を『ある』とする。

『ある』と答えた人の割合が半数を超えているのは、その人 (最も身近な難聴者) が「話を聞き間違える」(79.1%)、「話についていけない」(65.1%)、「あいまいに返事をする」(61.4%) といった会話のずれである。また、そうしたことが原因で生じる「話を理解できずにいららする」(31.8%)、「話に加われずにさびしそうにする」(29.0%) といった難聴者のいら立ちや孤独感も低くない割合を占めている。

図表7で難聴者の対面会話 (「静かな所で、家族や友人と1対1で向かいあって会話する時」) の聞き取り状況別にみると、聞き取りにくい場合ほど『ある』と答えた割合が高い傾向にある。

また難聴の自覚別にみると、自覚していない人ほど「話を聞き間違える」「あいまいに返事をする」「話を理解しているふりをする」「他の人の会話の様子を見て自分の話をしているのではないかと疑う」ことが『ある』割合は高い。難聴を十分自覚していない人は、こうしたコミュニケーション上の問題にも気づいていない可能性がある。

図表6 難聴者のコミュニケーション上の問題



注：「その人」とは最も身近な難聴者を指す（他の項目も同じ）

図表7 難聴者のコミュニケーション上の問題 『ある』と答えた割合
（対面会話の聞き取り状況別、難聴の自覚別）

(単位：%)

		話を聞き間違える 注1	話についていけない	あいまいに返事をする	話を理解しているふりをする	話を理解できずにいららす	話に加われずにさびしそうにする	自分の話ではないかと疑う 注2
対面会話の聞き取り状況別	聞き取れる(n=308)	73.1	52.3	51.9	37.7	23.4	21.8	16.2
	半々くらい(n=120)	92.5	79.2	73.3	57.5	35.8	35.8	23.3
	聞き取れない(n=117)	85.5	88.0	76.9	55.6	51.3	41.0	29.9
難聴の自覚別	十分自覚(n=287)	78.4	65.9	56.8	42.9	30.3	29.3	16.7
	ある程度自覚(n=202)	80.2	64.9	66.3	49.5	34.7	29.7	24.8
	自覚していない(n=60)	85.0	66.7	70.0	51.7	33.3	28.3	25.0

注1：図表6で示した「その人が」という文頭はすべて省略

注2：「他の人の会話の様子を見て自分の話をしているのではないかと疑う」の略

(2)コミュニケーションに関する悩み

回答者が周囲の難聴者とのコミュニケーションに関して感じる（感じた）悩みについてたずねた。以下では、「そう感じる（感じた）」と「ややそう感じる（感じた）」の合計を『感じる』とする。

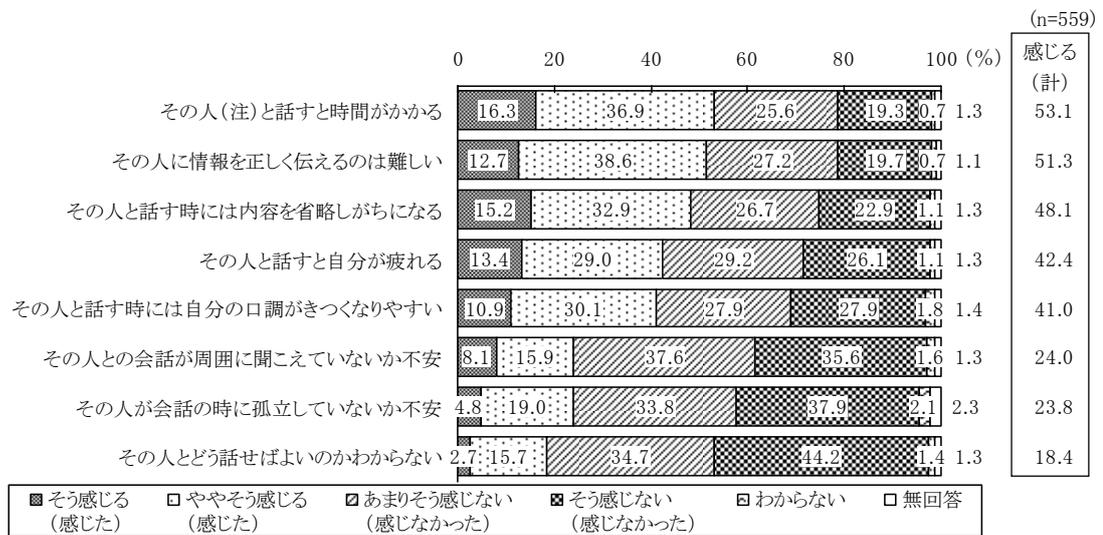
図表8の通り、「その人（最も身近な難聴者を指す。以下同じ）と話す時時間がかかる」「その人に情報を正しく伝えるのは難しい」「その人と話す時には内容を省略しがちになる」という会話のやり取りに関する悩みを『感じる』割合は半数前後を占めて

いる。また、「その人と話す時自分が疲れる」「その人と話す時には自分の口調がきつくなりやすい」と『感じる』割合も約4割となっている。

図表9で対面会話の聞き取り状況別にみると、難聴者が聞き取りにくい場合ほど回答者が悩みを『感じる』割合が高い。

難聴の自覚別にみると、不安に関する2項目（「その人との会話が周囲に聞こえていないか不安」「その人が会話の時に孤立していないか不安」）以外では、難聴を自覚していない人の周囲の人の方が悩みを『感じる』割合が高い傾向にある。

図表8 難聴者とのコミュニケーションに関する悩み



注：図表6と同じ

図表9 難聴者とのコミュニケーションに関する悩み - 『感じる』と答えた割合 - (対面会話の聞き取り状況別、難聴の自覚別)

(単位: %)

		その人(注)と話す時時間がかかる	その人に情報は正しく伝えるのは難しい	その人と話す時には内容を省略しがちになる	その人と話す時自分が疲れる	その人と話す時には自分の口調がきつくなりやすい	その人との会話が周囲に聞こえていないか不安	その人が会話の時に孤立していないか不安	その人とどう話せばよいかわからない
対面会話の聞き取り状況別	聞き取れる(n=308)	37.0	34.7	35.1	33.1	34.4	18.5	17.2	8.4
	半々くらい(n=120)	71.7	68.3	61.7	49.2	45.0	25.0	28.3	22.5
	聞き取れない(n=117)	77.8	80.3	72.6	60.7	56.4	38.5	36.8	41.0
難聴の自覚別	十分自覚(n=287)	55.1	51.2	46.3	41.8	38.7	22.6	24.7	16.0
	ある程度自覚(n=202)	49.5	51.5	50.0	39.6	41.6	26.7	23.3	20.3
	自覚していない(n=60)	61.7	56.7	55.0	60.0	55.0	23.3	21.7	25.0

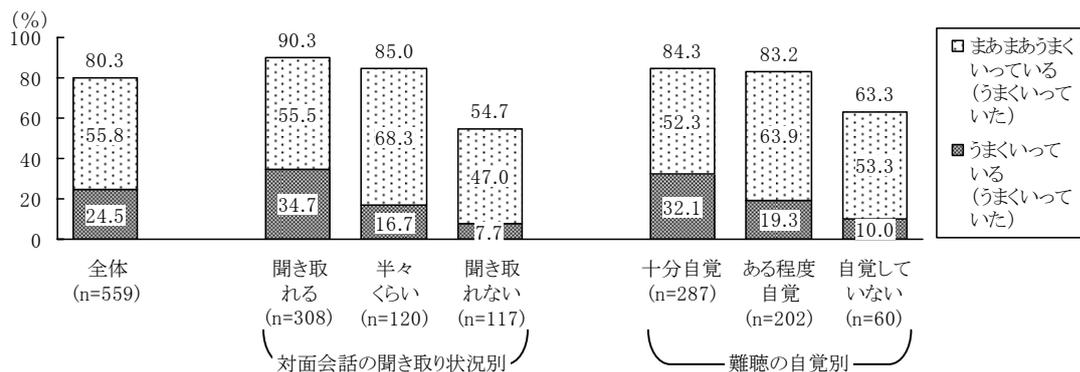
注：図表6と同じ

(3)難聴者とのコミュニケーションに対する評価

周囲の難聴者とのコミュニケーションは総合的に考えてどの程度うまくいっている(いた)かをたずねた。図表10の通り、全体では、「うまくいっている(いた)」が24.5%、「まあまあうまくいっている(いた)」が55.8%であり、両者を合わせた割合は約8割(80.3%)であった。残りの項目は図表には掲載しないが、「どちらともいえない」が11.6%、「あまりうまくいっていない(いなかった)」が4.8%、「まったくうまくいっていない(いなかった)」が2.1%であった。

難聴者の対面会話の聞き取り状況別では聞き取りにくい場合ほど、難聴の自覚別では自覚がない場合ほど、回答者はコミュニケーションがうまくいっていないと感じている。特に、対面会話を『聞き取れない』人や難聴を『自覚していない』人とのコミュニケーションがうまくいっていると感じる割合は6割前後にとどまっている。難聴者とのコミュニケーションは全体的には概ねうまくいっているものの、難聴者の聴力や自覚の程度が著しく低いと難しくなることがあるといえる。

図表10 難聴者とのコミュニケーションに対する評価(対面会話の聞き取り状況別、難聴の自覚別)

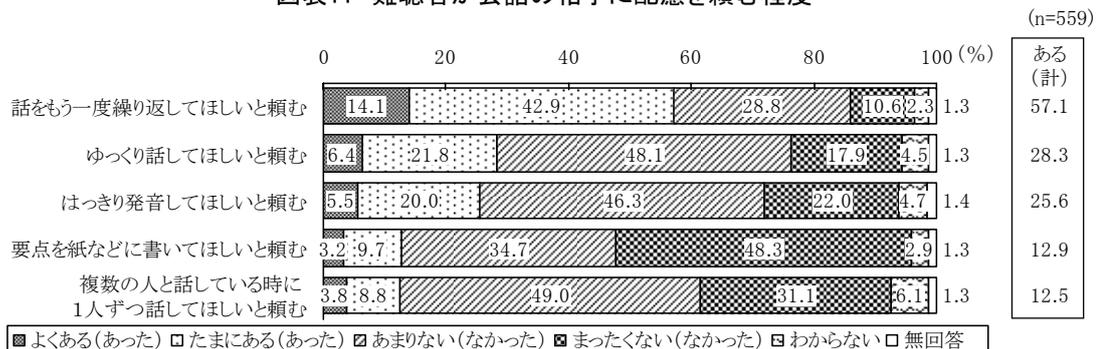


5. 難聴者の配慮の依頼

難聴者が図表11にあげる配慮を会話の相手に頼むことがどの程度ある(あった)かをたずねた。「よくある(あった)」と「たまにある(あった)」の合計を『ある』とする。

『ある』と答えた割合は、「話をもう一度繰り返してほしいと頼む」(57.1%)では半数を超えているが、他は「ゆっくり話してほしいと頼む」(28.3%)と「はっきり発音してほしいと頼む」(25.6%)が2割台、「要点を紙に書いてほしいと頼む」(12.9%)と「複数の人と話している時に1人ずつ話してほしいと頼む」(12.5%)が1割台でありかなり低い。つまり、難聴者が会話の相手に配慮を依頼することは総じて少ない。

図表11 難聴者が会話の相手に配慮を頼む程度



6. まとめ —高齢社会における円滑なコミュニケーションのために—

周囲に難聴者がいたことがあると答えた人の割合は8割を超える。その難聴者の多くは高齢であり、親を中心とする家族がかなりの割合を占めている。高齢者やその周りの人々にとって、また、高齢化が進む日本の社会にとっても、難聴をめぐる問題は身近でありかつ重要であるといえる。

難聴者が周囲にいたことのある回答者からは、難聴者とのコミュニケーションに関するさまざまな悩みや不安があげられている。例えば、難聴者が会話を誤解したり、会話についていけなかったりしており、会話の相手となる回答者は難聴者に情報を迅速に正しく伝えることに苦慮している。また、会話に入れない難聴者の孤立感やいら立ちなどに対する懸念は、過去の調査の自由回答欄で記述されていた(水野 2000)が、今回の調査でも示された。

こうした問題は、聴力がより低い人だけでなく、難聴を十分自覚していない人でも多く生じている。回答者の身近にいる難聴者のうち、聞こえにくいことをまったく自覚していない人はほとんどいないものの、十分自覚している人は半数程度にとどまっている。聴力検査によって高齢者などが難聴に気づける機会を充実させることや、「耳が聞こえにくいと思いたくない・思われたくない」という社会一般にある意識を変えることなどが必要であろう。また当然ながら、周囲の人の難聴者に対する配慮や理解も不可欠である。その点については追って詳しく述べる予定である。

【参考文献】

- ・鈴木恵子ほか, 2002, 「補聴効果評価のための質問紙の作成」『AUDIOLOGY JAPAN』(45-1).
- ・水野映子, 2000, 「高齢者の聴覚に関する問題点への対応策—ユニバーサルデザインの視点から— (上)」『LDI REPORT (2000年9月号)』.

※視覚障害のある方などが本稿のテキストデータを必要とされる場合は、当社までご連絡下さい。